

## ソーシャルワーク実践と福祉専門職

キーワード：ソーシャルワーク、福祉専門職、専門価値、スーパービジョン

○花澤佳代<sup>1)</sup>、木下英奈<sup>2)</sup>、長沼憲代<sup>3)</sup>、池乗桂<sup>4)</sup>  
新潟青陵大学<sup>1)</sup> 耕房“光”<sup>2)</sup> 耕房“輝”<sup>3)</sup> 角田の里<sup>4)</sup>

## I はじめに

2004（平成 16）年 5 月に精神保健福祉領域で働くソーシャルワーカー（以下、SW）11 名（同窓生）に、「新人 SW として大切にしている専門価値は何か」「自分自身をどのような SW に育てたいか」等に関するアンケート調査を行った。その協力者が現場経験 10 年を迎えたことを機会に、彼らが考えていた専門職像や専門価値に近づいた実践ができていないか（または変化しているか）等の再度のアンケート調査を実施した。

## II 研究の目的

専門職としての確かな価値・知識・技術を持ち、実践現場でサービス利用者（以下、利用者）のニーズに応えながら、組織の中で、ソーシャルワーク業務を実践できる新人 SW はいない。しかし、「利用者主体」の援助を実践したいという思いを持ち、現場に就職する SW は少なくない。その思いを支え、育てることが、より専門性の高い援助の提供が可能な SW を育てることになり、SW 自身のバーンアウトを防ぐことになる。今回のアンケート調査を通じ、利用者により良い援助を提供するために、SW 自身の意識（専門価値）や後輩 SW へのかかわりの現状を明らかにし、SW 育成における教育と実践現場の連携の課題について検討する。

## III 方法

2004（平成 16）年のアンケート調査協力者 10 名（連絡先不明者以外）に対して、2012（平成 24）年 5 月～6 月の期間に郵送・メールにてアンケート調査を依頼した。この調査の自由記述を、KJ 法を用い分析し、前回の結果と比較し整理した。倫理的配慮としては、調査は無記名で行い、調査結果は研究目的以外には使用しないことを質問紙に明記し、返信をもって同意と見なした。

## IV 結果（10 名中、9 名から回答。以下、一部を記載）

1. 理想の専門職像は、新人 SW 時と変わらず「利用者の主体性を尊重し自己決定を促すことのできる SW」「利用者の持つ力を伸ばし、自己実現に向けて支援する SW」になりたいと考え、実践を重ねていた。
2. 「表面上のニーズに目が取られ、利用者の思いや主訴を読み取る力が弱い」ことや「組織の一員としての判断が多い」こと、「利用者に丁寧にかかわる時間が取れない」ことから、理想の SW 像には、まだ近づいていないと考える人（9 名中 8 名）が多かった。
3. 「個別化」「総合性」「統合化」が SW の大切な専門価値であると考えていた。
4. 新人 SW には、「誠実に利用者に向き合い、共に考える姿勢」等を求めるが、自分自身は先輩 SW としてかかわられていない。

## V 考察

彼らが理想の専門職像に近づくため、また、専門価値に根付いた実践のために、工夫（研修や勉強会の活用等）していることが明らかになった。しかし、組織から求められる役割と、自分が大切だと考えている役割（専門価値）が異なり、さらに日常の業務に追われて、専門価値を実践では意識しにくい状況もある。

自分自身の「成長」が優先され、後輩育成に関する意識が低い現状があり、自分の実践の振り返りや後輩育成のためにはスーパービジョンが有効と考えていても、取り入れる余裕がないことが分かった。

## VI 結論

新人 SW の「ニーズに沿った利用者主体の援助を実践したい」という思いは、現実にはどうしたらうまく実践できるのかがわからず、不安を持つ新人 SW が多い。他方、大学教育では、学生に具体的なイメージを持たせ卒業させるには限界がある。実習教育及び卒後教育を通じ、実践現場の SW と教育者が協力・連携し、新人育成にかかわることが有効であると考えているが、組織と教育機関の関係のあり方に課題がある。

## 【参考文献】

- 井上牧子. 初任者精神保健福祉士の実践課題と卒後教育のニーズを探る—スーパービジョンの定着を視野に入れながら—. 目白大学総合科学研究, 2010;6;95-106